

## キユーピー社員がトレーサビリティ解説書を上梓 副題は「わくわくする現場改善三八年の歴史」

大手食品メーカー、キユーピーの高山勇氏は、加工食品のトレーサビリティ（履歴管理）に関する日本の第一人者だ。手作りの工を駆使してキユーピーの生産現場を高度化した実績を持ち、二〇〇〇年には同社のベビーフードの分野に本格的なトレーサビリティシステムを導入した。本誌二〇〇三年八月号特集ではインタビュ取材にも応じてもらったが、現在はキユーピーの技術本部で主席技術員を務める傍ら、「食品トレーサビリティシステム標準化推進協議会」の幹事などをこなしている。

その高山氏が、このほど『現場改善から生まれたトレーサビリティシステム』（日本工業出版）という本を上梓した。「わくわくする現場改善三八年の歴史」と副題にある通り、同氏がキユーピーの現場で、パート作業者などから寄せられる切実な訴えに応えてきた経緯が、つづ



『現場改善から生まれたトレーサビリティシステム』（日本工業出版、税別価格二四〇〇円）

に記録されている。八〇年代のキユーピーは、事務部門のスタッフはコンピューターに強いけれども生産現場に弱く、現場技術者は自動制御などに詳しいがコンピュータと連動させた作業管理は苦手、という状況にあったという。現場管理のほとんどは紙の伝票を使っていて、資材管理も、勘と度胸に依存していた。

当然、管理精度は甘くなりがちで、原資材の在庫がどうしても減らないという悩みを解消できずにいた。これを改善するため高山氏は、FA（ファクトリー・オートメーション）システムを独自開発し、その延長線上でトレーサビリティシステムも実現させた。このよつな実体験を持つだけに、「現場の改善なくしてトレーサビリティを先行させるのは本末転倒」と、昨今のIT主導のシステム構築には手厳しい。

技術者の著書らしくシステム開発の具体的な経緯が詳細に記されているが、注目して欲しいのはICTタグに対する評価だ。利幅の薄い食品分野でICTタグを採用するのは費用的に無理だと思つ、という著者の指摘は、自ら試行錯誤を重ねて二次元コードによるトレーサビリティシステムに行き着いた人物の言葉だけに説得力がある。加工食品のトレーサビリティについて勉強したい人には、必読の一冊といえるだろう。

## マルチテナント型の大型物流施設(12万平米)を プロロジスが横浜の臨港地区にオープン

物流施設専門の米系不動産開発会社プロロジスが、横浜市鶴見に二五〇億円を投じて建設していた「プロロジスパーク横浜」がこのほど完成、七月十一日に竣工式が行われた。同社の物件のなかでも最大級のマルチテナント型物流施設だが、すでに日立物流、ニコン、ブリヂストンスポーツ、エステエスの四社が入居し、稼働率は一〇〇%と順調なすべり出しである。

その理由のひとつとして考えられるのが立地条件の良さ。道一本を隔てて港湾地区に接する臨港地区にあるため、港に近いというメリットが享受できる。道路も東京大師横浜線（鶴見産業道路）に接し、首都高速横羽線生麦ICへは一キロメートルとアクセスは良好だ。京浜急行生麦駅も歩いて十三分ほどの距離である。

八七億円で購入した土地の敷地面積は五万二〇〇〇平米、五階建て（倉庫部分四階建て）の建物は延床面積が十二万平米ある。二八〇メートルある間口は、日本一の超高層ビルである横浜ランドマークタワーの高さに匹敵するのだという。

複数のテナントが同居するマルチテナント型施設であるため、四〇フィートコンテナトレーラーが直接各階へ乗



り入れができるよう、一方通行のランブウェイを二基（上り用・下り用）備え、一階には五三台、二・四階にはそれぞれ三三三台の大型車両が乗り付けることができるトラックパースが設置されている。また、天井高は五・五メートル超で、フォークリフトがトラックの荷台に直接乗り入れることができるドックレバラーも標準装備されている。

プロロジスは世界一六カ国に二〇四〇棟（二九〇〇万平米）の物流施設を所有・運営しており、日本では二〇〇二年より事業を展開。開発中のものを含め、現在全国に計二五の施設を運用している。マルチテナント型としては、二〇〇六年にも江東区新砂や浦安などでの開業を予定している。